

2014年01月23日

京都市みつばち保育園で「カエルの豆太」を上演しました

2014年は、京都への旅公演からはじまりました。

1月12日に京都市西京区桂のみつばち保育園のみなさんが、保育園をつくる会の取り組みとして群馬中芸を呼んでくれました。

数年前に若い保父さんからカエルの豆太をこどもたちに見せたいとの問い合わせをいただいて以来、ようやく実現した公演でした。

このたびも関東とは違う風土の中、職員のみなさん、実行委員会保護者のみなさんの誠実で丁寧なすすめかた、こどもたちの明るさや落ち着いた様子に触れることができ、うれしい出会いの機会をいただいた旅公演でした。

保育園は小さな可愛い大きい大ききで、園庭に入れなかった中型トラックを道端に停めながらの搬入でしたが、みつばち保育園は全国でもめずらしいそうですが、男性保育士さんの多い保育園で、みなさんがとても親切で軽やかに手伝ってくださったおかげで、とてもスムーズに舞台準備ができました。(平均年齢高め)の団員たちには思いがけずありがたいことでした…。

到着した日に準備をして、そのまま園舎に泊めていただきました。

空っ風が強く室内にいても隙間風で身震いする群馬とは違い、保育園の室内はとてもあたたかくて過ごしやすいので助かりました。

翌日は早朝からお母さんたちが今日の行事の食事準備のために給食室に集まって忙しそうに立ち働いている中、9時30分の開演時間に合わせて、俳優たちは舞台メイクをして控えました。

一番広い空間に設置した舞台を囲んで、大勢のこどもと大人がぎゅうぎゅう、ぎゅうぎゅう、大賑わいになっていき、最前列は舞台の敷物までこどもたちの座る位置を占めての上演開始となりました。

上演中とりわけ意外だったことは、劇中曲のなかで自然に合唱される歌としてはめずらしい「ヘビの伊三郎親分のうた」を、俳優の歌う声に合わせてこどもたちが一緒に合唱してくれたのは、嬉しい驚きでした。

後半のいのちの変化についてのことばの多い場面も最後までしっかりことばを聞き、見とっているこどもたちの様子にとっても感銘を受けました。

終演後にはこどもたちが舞台の中でカエルの豆太の歌を元気に歌ってくれたり、保護者のみなさんが『輝け命』という歌を合唱してくださいました。

みつばち保育園のこどもたち



この日は劇のあとも昼食会や福島県の元保育園園長(偶然にも劇団も親交のある保育園におられた小野さんという方でした)を招いて原発事故後の保育所生活について実情を聞くという記念講演などの予定が立て込んでいたということで、私たちはすぐに撤収に取りかかりました。
また屈強な保育士さん達に手伝っていただきながら素早く片付けを終え、お弁当をいただいたり、お礼を申しあげて、午後には帰路へと着きました。

みつばち保育園は市内の西山高原というところにも園舎があり、こどもの成長に合わせて‘お山の保育園’の自然の中で思いきり体を動かしているのだそうです。

無認可から認可保育園への運動を経て30年以上にわたり、保育園と保護者が協同して日々の保育に向かい、よりよい環境をこどもたちのためにつくりつづけている保育園なのだということを知りました。

カエルの豆太の生き方を保育園のみなさん方ご自身に重ねて、こどもがたくましく育つことを願うからこそ、この芝居をこどもたちに見せてあげたいという思いが、この度私たちが上演の機会をいただくことにつながったのだということ、みなさんにお会いしてようやく思い知ることができました。

みなさんの保育姿勢に終始私たちのほうが感服するばかりの二日間でした。

みつばち保育園の丸国園長先生、酒井さん、黒田さん、実行委員長の山下さん、職員と保護者のみなさんにとってもお世話になりました。そして若手の浅本さんはじめユニークな保育士仲間をつくっている保父さん達には、準備から片付けまでとてもお世話になりました。劇団員も心強く嬉しい体験だったと思います。

心から感謝と御礼の意をこの場を借りて申しあげます。

どうもありがとうございました。

『子どもらに緑と土と太陽を！ ~どの子も幸せな毎日を！ すべての大人で紡ぎ合う！~』

みつばち保育園をつくる会 記念プログラムより

2014年03月04日

二月の大雪

2月14日の大雪。

前橋は118年前から観測を開始して以来、最高の積雪記録だったのだそうです。

大雪の翌日から始まった雪との闘い。

こんなときはお互いさまですと、お向かいの喫茶店「虫の音」のチエさんとブライアンさんが雪かきを手伝ってくれました。

そして劇団員もご近所の困っている人の家へ行ったり、あちこちで道拡張や駐車スペースを広げようと雪かきを手伝いに行きました。



大雪から 10 日後、2 月 24 日の未来スタジオ。

劇団の男陣が連日奮闘して、ここまでにするのは一苦勞でした。

このころになると日中は残雪が溶け出し、スタジオの大きな屋根からも盛んに氷状の雪の塊がドッサドッサと、けたたましい騒音とともに落ちてくるのでした。その音は建物の中にいる者には、春雷のとどろきのように聞こえました。



もちろん落雪には十分注意しましたが、目の前でドッサドッサと落ちてくる場に居合わせてヒヤリとした人も…。

大雪の二次災害の怖さを実感する数日間でした。

おかげで除雪で積み上げた山よりも大きな雪山が出現し、まだ当分溶けそうにないまま玄関口に残っています。

ひとの通る道、車を止める場所、そして猫道をつくる

ため、雪と格闘し続けて二月は過ぎてしまいました。

3・11 震災時を思い出させる都市機能の混乱と、生活行動圏の自由を取り戻すための雪かきを来る日も来る日もやり続けて一週間が過ぎ、ようやく周囲の景色を眺める余裕も出てきました。



赤城山麓からみた榛名山 2 月 18 日



赤城の鍋割山 2月18日



鍋割山 2月28日



鍋割山 3月4日

鍋割(なべわり)山も日を追うごとに春らしくなっています。

劇団のプレハブは倒壊せず、ケガ人も出ずに大雪をやり過ごせたのは幸いでしたが、県内でも住宅の屋根やひさが壊れたり、片側柱の車庫やバス停、自転車置き場、農家の納屋や家畜舎、ビニールハウスが雪の重みで倒壊してしまいました。

いつも支援をいただく富士見町内の酪農家、下田さん宅も豚舎が倒壊する被害を受けてしまいました。何も助けられませんが気がかりにしています。

畑やビニールハウスで収穫を待っていた地場野菜も出荷出来なくなってしまうたり、農家のみなさんは大損害を被りました。

大雪の被害が収束しつつある今頃ようやくご報告する次第です。
本格的な春の訪れが待ち遠しいかぎりです。

2014年04月25日

あかぎ未来スタジオ春まつり

スタジオの林から鳥たちの様々な声が聞こえてきます。

若いウグイスがさえずりを猛特訓

その中にひときわ軽やかに♪フィフィ～ヨ、フィーヨと、のど自慢の聞き慣れぬ声
どうやらもとは中国からやって来た縁起のいい鳥、ガビチョウの声のようです。

日中を代表する鳴き名人たちの春の共演は、初夏が過ぎる頃まで続きます。

おなじみのカラスもワアワアと仲間に合図

意外とユーモラスで見ているとおもしろい

いつも何か考えていて、もしくは企んでいて、物を見つけては拾い、せっせと巣に運んでいきます。

桜が満開の頃、大騒ぎだったのはヒヨドリ

そろそろ甘い蜜がなくなってきたようです。

突然甲高い声でチョット来い！チョット来い！と繰り返すのはコジュケイ

あら！こんな近くにいたんですかと、スタジオの中に居ても驚きます。

他にもおなじみの小鳥や生き物たちが多種多様に、日に日に葉を広げていく新緑の中で春を謳歌しています。
寒さに強張っていた身体の芯がようやくほぐれていく今日このごろです。

さて、ご案内が遅くなりましたが、来る大型連休中の5月5日に、あかぎ未来スタジオ春まつりを開催いたします。

今回は劇団の自作品ではない初めての公演です。

団内の事情で舞台上演が行えない代わりに、古くから交友のある友人の方々が舞台を引き受けてくださいました。

前橋のチェロ演奏家の富山節子さんとピアノの伴奏による音楽コンサート。

身体を開放させる“野口体操”の伝道師であり、モスクワ中央人形劇場と交流の深い大井弘子さんの手使いによる小さな人形劇を続けてご鑑賞いただく午前の部。

大人も子どもと一緒に夢中になれる《あそびのひろば》など、どなたでも思い思いに楽しんでいただけるような春まつりです。

連休中、赤城山へお出かけの折は、ぜひ未来スタジオにもお立ち寄りください。

劇団 群馬中芸企画
あかぎ未来スタジオ春まつり

チェロとピアノのコンサート
チェロ：富山 節子 ピアノ：平方 幸子

プログラム
エルガー ‘愛のあいさつ’ ドボルザーク ‘ユーモレスク’
ボッケリーニ ‘メヌエット’ メンデルスゾーン ‘無言歌’

大井弘子の小さな人形劇
手そのものの動きが伝わる手使い人形の魅力あふれるひとり舞台
素朴で小さな人形たちがつくりだす“手のファンタジー”
～プログラム～ ねこ・りんご はいしゃ カルメン
モコちゃんのマジックショウ 他

あそびのひろば
おもいっきりふきとばそう！ 吹き矢 ひげおじさん
へえふしぎ、おもしろいね 理科の実験 いしばし
つくってみよう！ 紙あそび らいおん
ほかにもまだあるよ…当日のおたのしみ

2014年 5月 5日 (こどもの日)
コンサートと人形劇 午前11時 開演
あそびのひろば 午後1時～3時 まで
おとな 2000円 こども 500円
(5才～高校生)

券・あやつの販売あります

※当日の天候により午後の内容を一部変更する場合があります。

2014年05月15日

「あかぎ未来スタジオ春まつり」にご来場いただきありがとうございました。

ゴールデンウィーク中の5月5日は、早朝に東京湾近海で大きな地震があったり、また朝からあいにくの曇り空にもかかわらず、大勢のみなさんが未来スタジオへ足を運んでくださいました。

チェロの演奏を聴き、手使いの人形劇をご鑑賞いただく午前の部と、スタジオや林の中で色々なあそびを親子で楽しむ午後の部という二部構成の企画を、みなさんのご都合に合わせて思い思いに楽しんでいただきました。

当日の公演風景をご紹介します。



前橋在住のチェロ演奏家の富山節子さんのコンサート。ピアノ伴奏は平方幸子さん。

劇団の古くからの友人である富山節子さんの演奏を聴くことのできる機会は少なく、多くの方々に喜ばれました。



音楽の演奏後、続けて大井弘子さんによる手使いの人形劇が同じ舞台の上で始まりました。共演するのは劇団の秋山さんです。

人形ってこんなに素朴でいいんだ

人形や裸の手からこんなにも想像の世界がひろがるんだ

懐かしくてあたたかく、ユーモアに満ちていて、少し怖いところもある

大井さんの舞台は、大人も子どもも、客席が舞台と一体になり、どんな人でも出会えばその魅力に魅せられる、すばらしいパフォーマンスでした。



出演者のみなさんです。

(左から富山さん、平方さん、大井さん)

富山さんも大井さんもととても小柄な方です。その中から力強い表現力が生まれることに驚きます。



この日はスタジオ中、おまつりらしい飾りを施したり、あそびのひろばの案内看板をあちこちに立てました。

緑したたる林の中、石橋先生の弓矢コーナー。



スタジオのリハーサル室では、吹き矢のコースが出現。

細長い筒に矢を込めて吹いてみると、意外なほど遠くまで飛んでいきます。

一度やってみると、だれでもはまってしまいます。

吹き矢はれっきとした協会のある、ヨーロッパ発祥の認定スポーツなのだそうです。



ライオンおじさんの紙細工のコーナー。

絵の具で色をつけたり、ハサミを使ったりして、頭に被るお面やブーメラン、くるくる旋回しながら舞い下りてくる紙おもちゃをつくってくれました。



女の子たちが夢中になったのは、みねさんの封筒人形コーナー。

さっき観た人形劇のようにお話がつくれそうでした。

廊下では、木工教室を開いている柏葉さんという方の手作り作品を自由にさわって遊べるコーナーもあり、シーソーやバイクの乗り物が人気でした。



そして今回も桶川市のいなほ保育園父母のみなさんが、食堂やおやつ販売をしてくださいました。

常連のみなさんや公演の手伝いをしてくださったみなさんのおかげで、今年の五月の催しも無事終了することができました。

みなさんありがとうございました。

スタジオの駐車場は詰め込み式のため、午後もゆっくりしたいという方まで、車の移動の都合上、そのままお帰りになるという状況をつくってしまい、ご不便をおかけしたことを申し訳なく思っております。

至らなかったところは、今後の課題にいたします。

《音楽と人形劇の裏方としての公演を終えて》

音楽のコンサートと演劇や人形劇の会場空間の条件は対照的であり、音楽演奏のためには細かな配慮がより必要であったということが課題として残りました。

大井弘子さんは群馬中芸の舞台を毎回のように東京から見に来てくださり、いつも劇団にとって貴重で大切な助言をしてくださる大先輩の舞台人です。

ソビエト時代からロシアの舞台芸術を深く学び、文化交流をつづけていらっしゃる大井さん。

古く「人形座」の頃から、現在は「ビバボ人形劇」の一員である大井さんの舞台を、この度群馬で上演し、みなさんにお届け出来るというまたとない機会となりました。

大井さんの『手のファンタジー』は、客席のみなさんはもちろん、舞台裏で手使い人形を生み出す大井さんの後ろ姿を目の当たりにした劇団にとっても、とても魅力的な表現者の姿でした。

また、共演者として出演することで、みる人とのかけあいから生まれる交流を肌で実感することができ、とても学ぶことの多い体験をさせていただきました。

おまけの写真



「あらいけない！ 小道具のかさを忘れたわ！！」
(舞台仕込み中の大井さん)

2014年10月10日

劇団 群馬中芸 秋のこども劇場 新作「どんぐりと山猫」公演

短期間のお知らせのまま当日を迎えた劇団の新作発表公演は、10月5日の日曜日に行いました。台風の影響による雨が朝から降り続く肌寒い日でしたが、この度も大勢のみなさんが未来スタジオへ足を運んでくださいました。

生まれた赤ちゃんを抱いたお母さん、今日はどんな劇をやるのだろうかと好奇心に満ちた目をくりくりと動かし、賑やかにホールの中を駆け回るこどもたち、交流のある保育園の職員さんは中芸の新作はどうだろうかという様子で、そして電車を乗り継いで遠くから来られた方などでにぎわうスタジオは、劇場としての本来の顔を取り戻していくようでした。

また、合羽姿で駐車場の誘導を手伝ってくれたお父さんや若者たち、受付や売店、食堂の準備に早朝から駆けつけてくれたみなさん、公演に協力して下さった多くの人びとに支えていただきながら‘秋のこども劇場’を開催することが出来ました。

劇団員一同、心より御礼申し上げます。この度も誠にありがとうございました。

当日の公演の様子です。



群馬中芸は創立時から宮沢賢治を舞台化してきました。

この20年ほどは賢治童話を原文のまま語り演じる‘イーハトーヴォものがたり’シリーズとして、『やまなし』や『とっこべとらこ』『なめとこ山の熊』『注文の多い料理店』『雪渡り』などを取りあげて、その高潔ともいえる宮沢賢治の文学世界をどのように演劇化することができるか模索し舞台化を試み続けてきました。

そしてこの度は『どんぐりと山猫』を俎上にあげました。

めったに見ることのできない山猫から届いた手紙。東をめざしてひたすら進んでいく一郎少年。道中で出会う森の生き物たちとのやりとり。暗いカヤの森をぬけると金色の草原が広がり、そこで出会うおかしな男・馬車別当との会話。とうとう姿をあらわす山猫。やがて人間の男の子の前で繰り広げられる、童話の中でも一番想像力を掻き立てられるどんぐり裁判の光景やそのてん末。黄金のどんぐりをお礼にもらい、きのこの馬車で家へと送られる一郎など、どの部分をとっても読み手が十人十色に情景を思い描くことのできる「どんぐりと山猫」。

劇団の座付作者、演出である中村欽一さんと団員とが舞台化に挑む中、唯一の道しるべになったのはただ宮沢賢治の原文だけでした。

そして、劇中の音楽を作曲して下さった本庄市の音楽教諭・中村忍先生や、どんぐりたちのガヤガヤさわぐ声を吹き込んでくれた桶川市のいなほ保育園学童組のこどもたちによる声の効果音に大いに救われて、この夏中諸事情により難航した稽古はようやく一つのかたちとして劇場公演でお披露目するまでに漕ぎつけることができました。

私たちの試行錯誤のどんぐり裁判の行方は観る側のみなさんにどう伝わったのか。

〔劇団が直接伺った感想〕

こどもたち

- ・どんぐりの声が誰の声か全部わかった(いなほ保育園のこども)
- ・山猫が出てきたのがとても怖かった
- ・裁判のところはよくわからなかった
- ・どんぐりがおいしそうだった
- ・馬車が空を飛んでいるようにみえた

おとなたち

- ・どんぐりがたくさんいる感じがした
- ・照明や音響が控えめでゆったりとした劇の感じがかえって新鮮でリフレッシュできた
- ・人形操作など気になるところはあったが、汚れのない感じがよかった
- ・音楽がよく聞こえず活かされていなかった

おおむね好意的にとらえてくださる人が多かったようでした。

会場条件に合った音響操作にいつも課題を残してしまいます。

演出が追及する賢治文学の内容理解、童話の中に暗喩される人間の社会構造、あぶりだされる人間像、山猫に込められた大人の狡さや権威主義、自然と交感するこどもの純粋性や大人の茶番劇を見抜く鋭さなど、この童話から感じとることのできるものを、演劇を通して一つの表現をするという試みは、まだまだ途上にあります。これからも模索し続けてゆきます。

まだ十分に広く公開できませんでしたので、今後も「どんぐりと山猫」の上演の機会を設けたいと思っています。また、観劇の場を検討されている方はどうぞ劇団までお問い合わせください。

秋のこども劇場においでいただいたみなさま、どうもありがとうございました。

以下は本題と関係のない話題です。

~~ねこ団ブログ~~

《さよなら クロ》

中芸は未来スタジオに事務所を間借りしている劇団。

スタジオには二匹の捨て猫からはじまる‘ねこ団’があった。

A子、B子と名付けられた二匹のメス猫は、劇団員にかわいがられ、やがて家系をつくっていった。

全盛期には松の木に果実のように連なって、朝エサを運んでくる人間を待ち構えていたものだった。

とうとう10年前にはその当時の女番長・シロペンとその一族が劇団の新作芝居の主人公になった。

シロペンは器量悪しの三毛猫だったが、男前な女ボスで、巡回する野良犬軍団さえ体を張って追い払った。

そんなシロペンもとうとう力尽き、オスどもはふらふらと蒸発。

あわやねこ団史も尽きるかと思えた頃、一匹の真っ黒な子猫が毛を逆立てながらも何か食わせるとスタジオに迷い込んできた。

お役御免と思っていたエサ運び係、よくみるとその子猫は女の子だった。

黒いからクロとか、くーちゃんとか呼ばれてかわいがられ、凜とした勇敢なメス猫に成長した、、、

と、しみじみする間もなく、翌春には5匹の子猫を産んだ。それはみんな女の子だった。

そして、一年に二回クロと娘たちは子どもを産み、やれ可愛いが、ああ困ったと、劇団のエサ運び係はてんてこ舞いだった。

しかし、赤城野の自然は厳しい。

やがて起きた東日本大震災と前後して、仔猫やクロの娘たちが次々にあの世へと旅立っていった。

とうとう一匹になってしまったクロ。

それから三年が過ぎ、風邪を引いても自力で治し、動物病院ではじつと静かに我慢して治療を受けた。

エサ運び係になつき、よく甘える人間好きの性格だったが、今年の初夏のどに腫れ物が出来、今回ばかりは助からなかった。

A子B子の直系シロペンとクロが産む子は似ていたから、クロも初代の子孫だったのかもしれない。
猫はネコ科らしく、群れはメスを中心につくるようだ。
どの代のボスも勇敢で賢いメスたちだった。
この8月、劇団員が新しい劇を作っていた時、スタジオから姿を消したクロ。
残念だが、ねこ団は幕を閉じた。

A子、B子、シロペン、クロ、みんなありがとう。ごくろうさまでした。

2014年12月28日

2014年を振り返って 一丸山亜季先生、久保田穰先生、ありがとうございましたー

しばらくぶりにブログ記事を更新します。

2014年の劇団活動を、今年も多くの方々に支えていただきながら、無事終了することができました。
この一年間舞台でお会いしましたみなさまに心から御礼申し上げます。

“学校行事の精選”で、年々演劇鑑賞教室を行う自治体や学校が少なくなり、必然的に劇団も学校教育の中で創作劇を上演する機会は減少する一方となりました。

さらに、全国規模で事業を展開する大劇団は、地域一帯の小学生を大きなホールに集めて、スペクタクル劇やミュージカルを全国各地で上演し、地域の小学校はその抽選に当選待ちをするという実情もあります。

群馬中芸は今年の後半になって県内各地の小学校を中心に数十日の演劇公演の機会を得ることができました。

体育館内で出会う現在の子どもたちは、6年間の学校生活の中で数回めぐる芸術鑑賞の機会を楽しみにしている子どもも大勢います。あるいは、全く生の演劇に触れる機会のなかった子どもたちもいます。

私たちは毎回開演の直前まで、今日の子どもたちはどんな様子だろうか、興味を持っているだろうか、疲れていたり、眠そうにしている子はいるだろうか、幕が開くつかの間、緊張がはしります。

演劇鑑賞教室で訪れる地域それぞれに、また学校ごとにその日の雰囲気はことなるので、同じ上演作品でも毎回劇が終わるまで予想通りに事が運ぶことはありません。

最初から最後まで熱心に楽しそうに劇をみて、反応の声や歓声があがる舞台になると、私たちも力を得ます。

ところが、俳優が精一杯演じていても、始終子どもたちの集中力を劇に向かわせることができない公演や、とても静かに観ている子どもたちが劇をどう見とっているのか手応えがつかめないという日も生まれます。

私たちの舞台は場面転換の少ない、視覚的効果も音響効果も控えめな、素朴で拙い演劇世界ですので、いまの小学生たちには物足りなさを感じさせることもあると思います。

それでも、体育座りをして最後列で観ている六年生までが、へんてこな聞き慣れないことばを発する大人たちのやりとりをじっと見つめてくれたのだと、上演が終わった後に気づかされることも度々ありました。

後日劇団に、異年齢の子どもたちそれぞれが感じるままの個性的な感想を行事を担当された先生が送ってくださることがあり、その感想文を拝読中、めざましくユニークな感性を持った子どものことばに出会うと、心から嬉しくなりました。

観劇直後の劇的効果なのかもしれませんが、子どもたちが自分のなかに思い描いたイメージは、時を経て劇の内容が記憶の中で薄れていっても、舞台の一場面が心のどこかに残っていてくれたらいいなと思わせられます。

そして、よりよい舞台を子どもたちに届けられるよう、これからも努めてまいります。



孺恋西小学校にて「どんぐりと山猫」公演



「ゆめみこぞう」



「なめとこ山の熊」



「パンパンペ ペナンペむかしがたり」

私たちは小中学生の他に、同じレパートリーを保育・幼稚園の子どもたちにも観てもらいます。今年も県内外の保育園にて公演の機会を多くいただきました。

「カエルの豆太」は今年11月16日に逝去された作曲家・丸山亜季先生の音楽ということもあり、関西から東北地域まで舞台を向かわせていただきました。

保育実践をするみなさんから、こちらの方が新鮮な感銘を受けることばかりなのですが、そこで出会う子どもたちは豊かな感性と明るさ、やさしさや落ち着きを持ち、うつくしく輝いている子どもたちばかりでした。

丸山亜季さんと、ご主人で作家の故・木村次郎さんは劇団の創立時から創造活動の強力な助言者でした。

亜季先生は91歳で亡くなる数日前まで、保育園の音楽リズムでピアノを弾かれていたそうです。

最期まで亜季先生らしい颯爽とした生き方を貫かれたのでした。

その喪失感は大きいですが、群馬、埼玉、そして全国中に音楽教育実践を受け継ぐ人々もまた大勢おられると思います。

未来スタジオには昨年5月の劇団創立50周年の集いで音楽教育の会のみなさんの合唱にピアノを弾いてくださったのが最後となってしまいました。

亜季先生、長い間ご苦労様でした。こんな言葉を申しあげるのもおこがましいですが、ほんとうにお疲れさまでした。そして、長い間劇団を音楽面で支えていただき、ありがとうございました。



昨年の劇団創立50周年の集いにて

そして、詩人であり優れた教育者の久保田穰先生が長く肺気腫による闘病を続けて後、12月21日に亡くなりました。

久保田先生もまた、劇団にとって大切な精神的助言者のお一人でした。

劇団の座付き作者の中村欽一さんの同い年の良き理解者でもあられた方でした。

現代社会を鋭く見抜き、時に警鐘を鳴らし、知性により人間社会の弊害を乗り越えようとする生き方の姿勢に多くの人々が教えを受け続けました。

何よりも、子どもから大人まであまねく人々の可能性を信頼され、人としてのあたたかさ、優しさ、強さがお人柄の根底にありました。

徒党を組まずいつも凜とした、そしてとても繊細な方でもありました。

この夏劇団が中村さんとつくりだした新作・宮沢賢治の「どんぐりと山猫」をご覧いただくことを願い、先生もご覧になることを楽しみにして下さったまま、叶わずに逝かれてしまいました。

久保田先生が遺された詩や数々の文献は、詩集や同人誌、機関誌として発刊され、目に触れることができます。わかりやすい平易なことばで、私たちに語りかけて下さった久保田穰先生。

心から哀悼の意を表します。

先生、ありがとうございました。



惜別のつづいた2014年、そして、今年も多くの子どもたちに舞台上で出会うことができました。

創立50周年の集いにて

平和教育とは、うつくしいものをうつくしいと感じる心、醜いもの、嘘や虚偽を見抜き、自ら考える力を子どもたちの心の内に育てることであるという、久保田先生の教えを胸に抱き、新たな年を迎えたいと思います。

今年一年お世話になりましたみなさまにこの場を借りまして、重ねて御礼申し上げます。

2014年も変わらぬご支援をいただきありがとうございました。

来る新年がより良きことの多いことを願います。

劇団 群馬中芸